

山武農業に「新しい風を」吹かそう！

11月30日・東金文化会館で 青果物情勢の大きな変化を知り、農業に新しい風を吹かそうと、農業者・男女214名の参加で、山武農業フォーラムが開かれ、熱気のある討論が夕方まで続きました。



会場からは「ねぎやいちごの輸入はどうなっていくのか。どう対応したらよいか。」「現状の市場販売だけでよいのか。直売を取り入れた経営にすると大変になるが、取り組む意義は大きいのではないか。」「消費者を意識した生産で価格に反映させることができるのか。」等、真剣に農業に取り組む若い参加者からの、意見や質問が多く出されました。



パネラーからの提言をまとめると、次のような内容でした。

- 1 30兆円に達しようとしている外食産業に、どう農産物を供給していくか。食の外部化は45%に、食の外部化に伴い農産物需要も変化している。
- 2 競合型農産物の輸入は今後も増え、ねぎも600円で外国から入る。国産が輸入品の3割高で出荷できる生産費で作れるかがポイント。
- 3 輸入品をきちんと店頭で調査し、それに対抗できる新たな商品対策に取り組む。
- 4 自ら作り、自ら売る。他力本願ではダメ。直売は経営情報をつかむ手段。
- 5 これからは市場も組織との取引。産地も組織で、販売先を考えた生産に取り組む。

輸入攻勢・価格破壊情勢のなかで、農業者自信の英知で新しい風を吹かせましょう。

スイートコーンの新品種

千葉県のスイートコーンは宮崎・山梨に続く大きな産地です。6月中旬～7月上旬にかけては市場占有率も高く、消費者のほとんどが千葉県産を食べていることとなります。

最近の消費者の動向を見ると、甘くて皮が柔らかいものを好む傾向があるようです。キティーコーン（早生）・味来 390（中早生）が、山武地域の代表的な品種ですが、一長一短あり、より完成度の高い品種が求められています。



早生種

早生種の多くは、バイカラー系で占められています。

現在最も多く栽培されているキティーコーンは、早生性でボリュームがある反面、先端が莢の外に出やすく、鳥害やアワノメイガの食害を受けやすい特徴があります。

昨年試作をした中で、このような欠点をカバー出来る品種として、キティーより2～3日遅れますが、F S W 258 B（フジイシード）・M K Z28（みかど育種農場）が上位の成績でした。また、イエロー系では、T C 18（サカタのタネ）も高成績でした。

中早生種

味来 390 の出現以来、イエロー系の品種が人気になりました。味来のインパクトが大きかったため、味来の特徴である皮が薄くて甘いスイートコーンが求められるようになりました。各種苗会社ともこの特徴を備えた品種を開発中ですが、総合的に味来を超える品種はなかなか出てきません。その中でも、ゆめのコーン（サカタのタネ）は、味来と比較して、若干小さめですが味・食感とも良く、味来に迫る品種といえそうです。

消費者の味の追求はとどまるところを知りません。栽培する立場からすると、味の良い品種は作りにくいことが多いようです。しかし、基本に忠実に栽培することが、品種本来の持っている特性をうまく引き出す、一番の近道だと考えます。

水田・・・冬期耕うんの効果

秋耕いは、稲わらの分解や、多年生の雑草の防除に役立ちます。しかし、秋耕いが出来なかった水田では、冬期の耕うんを行ってはいかがでしょう。

冬期の耕うんは、多年生雑草の防除や近年増加しているジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）の防除に効果があります。

ジャンボタニシへの効果

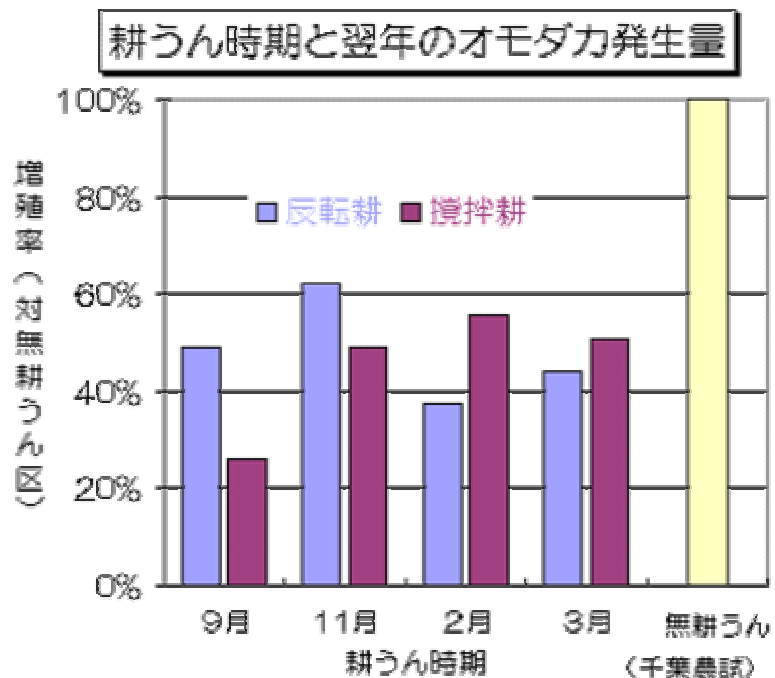
山武地域でも海岸地域を中心にジャンボタニシが増加しています。

この時期ジャンボタニシは、水路や水田の土壤中で越冬しています。1月～2月の厳冬期にローター耕を行い寒さや乾燥に合わせると約半数程度の貝を防除することができます。また、従来の日本のタニシに比べ殻が薄いので、ローター耕を繰り返すことで、殻が壊され防除効果が高まります。

多年生雑草への効果

地中にイモ（塊茎）を作るオモダカ、ウリカワ、クログワイ、ミズガヤツリといった多年生雑草は、秋耕いによりイモの増殖を抑えられますが、12月～2月の冬期にローター耕を行い寒さや乾燥に合わせることで半数近くを防除出来ます。

ジャンボタニシも多年生雑草も耕うんだけでは十分な防除効果には達しませんが、作付時期の対策と合わせて総合的に防除しましょう。また、水田が乾いていることが効果を高める条件です。



植木・・・樹木につくコケ

コケとは？

樹につくコケの多くは、菌類（カビやキノコ）と同じ仲間の地衣類です。同じコケと呼ばれているものに、地面に生えるゼニゴケやスギゴケがあります。これらは、蘚苔植物なので植物分類上、樹につくコケとはまったく別のものです。地衣類（樹につくコケ）は、体の中に藻類の細胞を取り込んで、共生しています。この共生藻が光合成を行い、地衣類はその栄養をもらって育っています。そのため、地衣類は、明るい場所ほどよく繁殖します。

なぜ樹にコケがつくの？

樹が弱るとコケが目立つため、コケが原因であると思いがちです。でも、コケは樹に付着しているだけで、樹から養分を吸っていませんので、樹への害はありません。このことは、墓石や石垣などにも地衣類がつくことからわかります。

樹勢が弱まり葉が少なくなり、幹や枝に光があたるようになると、コケが増えやすい環境になるのです。

対策は、樹勢が弱くなった原因を、改善することです。樹勢が弱る原因としては、根詰まり、排水不良、強剪定などが考えられます。また、冬期に石灰イオウ合剤を散布することにより、コケを少なくすることができます。

コケは大気汚染のバロメータ

地衣類の多くは大気汚染に弱く、都市化が進行した地域や工業地帯などでは、ほとんど見られなくなっています。

多くの種類のコケがみられる山武地域は、空気のきれいなところといえます。



（写真はウメノキゴケ・・・この辺りでよく見られる）

米と大豆の付加価値販売

パワー全開・・・北清水営農組合・加工部



「今年の味噌は『清水の里』をお買い上げ下さい！」横芝町農業祭で、試作品の味噌をPRする加工部員の元気な声が響きます。揃いの赤エプロンは販売時用、加工時の作業着は真っ白と、TPOを心得ての服装がひときわ目に留まります。北清水営農組合農産物加工センターは、みそ「清水の里」の製造から販売を行う場所として、昨年11月に誕生しました。ここでは味噌の他に、米こうじ、赤飯、もち等を中心に新年から製造が本格化します。材料は地元北清水で大規模水田転作として作られた大豆、それにコシヒカリを使ったこうじ。安心・安全・おいしいの3拍子揃った地域の新産品が出来ました。16名の部員のパワーは全開。製造に販売に、フル回転の年を迎えました。

(写真はユニフォーム姿の部員のみなさん)

横芝町農業振興大会開かれる

振興大会は、昨年10月26日（金）横芝町中央公民館において開催されました。

講演では、東京農業大学教授の藤島廣二氏が「セーフガード発動の功罪と今後の見通し」というテーマで話しました。

今後の方策として、1 流通面のコスト削減、2 加工及び業務用分野への開拓、3 輸送時間の短さ、鮮度など、国内産地の有利性の活用、を強調しました。

実績発表大会では、「就農8年目、私の農業」というテーマで、青年部会の鈴木恒之氏より発表がありました。

1年間を通じて、収入のある経営をしたいという思いから、カトレア栽培を開始したこと。野菜を含めた販売成果分析の実践や、今後の経営方向についての発表でした。

